



TITLE:

雜録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜録. 日本外科宝函 1930, 7(2): 323-326

ISSUE DATE:

1930-03-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200529>

RIGHT:

伊藤先生ノ思ヒ出

森 武 美

私ガ先生ノ教室ニ入門セシハ明治35年3月デ外科外來診察室ニテ初メテ先生ニ面會シタ。其時ノ先生ノ訓示ハヒゲハキタナキ故常ニ剃テ貰ヒタイ。看護婦ハアナタノ下女デハナイカラ私用ニ使テハナラス。病人ニ對シテハ常ニ丁寧ニシ言語舉動ニ不遜ナラス様。出來ナイ仕事ハスグ出來ヌト云フテ貰ヒタイ、ソウデナイト迷惑ヲスルカラト云フ様ナ事デアツタ。先生ハ當時毎日午前ニ外來診察、午後ハ手術、隔日ニ病室ノ廻診、1週1回臨床講義ヲセラル、他、朝早ク外科ノ講義ヲセラレ尙院長事務モ見ラレ決シテ盲目印ハ捺サナイト云フ評判デアツタ。夫レデ隨分御多忙デ朝早クヨリ晩ハ7—8時頃マデ居ラレ日曜ニモ折々見エタ。先生ノ外來診察ニツイテ居テ處方箋ヲ患者ニ渡ス時言葉遣ヒガ惡イト、グモウ一遍云フテ見ナサイト云ハレタ、少シ違ヘテ云フト夫レハ違ヒマス今云フタ様ニ云ヒナサイト詰問セラレ皆閉ロシタ、又藥ノ用法デモ間違テ居ルト、モウ一遍云フテ見ナサイ、ソナ事ナラ賣藥屋モ同ジコトデスヨト嚴シク注意セラレタ、夫レデ處方箋ヲ渡スニワザワザ患者控室ノ方ヘマデ行テ渡シタリシタ。先生ハ私共ノ取りシ病床日誌ノ過ヲ直ニ指示シテ直サスコトナク、單ニ之レハ違ヒマスヨト云ハレタ。之レガ先生ノ私共ニ對スル教育デアツタ、夫レデ私共ハ何處ガ違フテ居ルカラ見付ケルニ骨ガ折レタ、特ニ退院時ノ現症ニハ弱ツタ。患者ハ今退院スルト云フシ現症ハ一度デ宜シイト云ハル、事ハ稀ナル出來ノ時デ多クハモウ一遍デ返サレ長イ廊下ヲ何度モ小走リシテ往復シタコトハ昨日ノ様ニ覺エテ居ル、夫レデ退院前ニ豫メ許可ヲ受ケテ置ク様ニシ、又ワザト先生ノ忙シイ様ナ時ヲ見計ヒ持ツテ行タリ、或ハ窮シテ夜分小使ニ持テ行テ貰ヒ許可ヲ受ケタリナドシタ。先生ハ「モヒ」ノ様ナ麻醉劑ガ御嫌デアツタ、若シ用ヒヨウ者ナラ必ズ理由ヲ尋ネラレタ、夫レデ常時ハメツタニ用ヒナング。又充分診察モセズニ他ノ科ニ診察ヲ頼ムト、齒抜ト同ジ様ニナルカラ先ヅヨク診察セヨト注意セラレタ。私ハヨク麻醉手ヲヤツタガ麻醉中居眠シテ居ルト昨夜ハ宿直デ度々起サレマシタカト云ハレタ、實際ハ病院外宿直ノ事モアツテ大ニ恐縮シタ者ダ。先生ハ物品ヲ不經濟ニセヌ様ニ注意セラレタ。或ル時私ハ退院現症ヲ罫紙ニ書イテ行タ處注意セラレタ故、之ハ私ノ紙デスト申立タ處ガ、私ノ物デモ病院ノ物デモ同ジコト物品ヲ不經濟ニシテハナラヌト云ハレタ以來私モ「ガーゼ」ノ包紙ニ書イタ、又手術後折々不潔桶カラマダ白イ「ガーゼ」ヲ取り出シテ注意セラレタ。私共ハ大ニ緊縮シタ。私ニ取リテ忘ル、事ノ出來ヌ事ハ、「インシアス」事件デアル。アノ患者ハ私ノ受持ノ學用患者デアツタ、退院後1—2ヶ月シテカラ毎日病院ニ來リ私ニ文句ヲ並べ、惡クタレヲツイテ居タ、私

ハ叮嚀ニ云ハスト叱ラレルカラト思ヒ恐ル恐ル相手ニナツテ居タ、或時アノ患者ハ何ヲ云フテ居リマスカト尋ネラレタ、ソコデ私が今マデノ經過ヲお話シタ處ガ、先生ハ御不満ナ様子デ何ンデモ只ヘーヘート云フテ居テハ仕方ガナイデハナイカ、明日カラ事務ノ方ヘ頼メト云ハレタ、夫レカラアノ様ナ事件トナリ御心配ヲ懸ケタ。

此當時先生ハ醫局員一同カラ非常ニ恐レラレタ、先生ノ足音ガスルト皆ソレト云フテ緊張シタ、而シテ又先生ノマネガ流行シタ。先生ガ廊下又道路ノ一側ヲ少シ俯キ氣味ニテ早足ニ歩カレル其歩キ方ヲマネシ、又先生ノ言葉ノ句調ヲマネシ、或ハ先生ノ書風ヲマネル等大シタ者デアツタ、中ニハ先生カト思フ程ウマク歩ク者モアツタ。先生ノモウ一遍見テ來ナサイト云ヒ其過チヲ私共ニ自覺スル様ニ仕向ケラレシ事ハ私共ニ取リテ大變有リ難イ御教育デアツタ。忘レヨウト思フテモ忘レル事ノ出來ヌ處デアル。

### 故伊藤隼三先生ノ追懷

京都 革 島 彦 一

7月ト9月ノ外科實函ニ、京城帝大ノ佐藤氏ト目下滞歐中ノ島瀉教授トカラ、故伊藤先生ノ思出話ガ載テ居タ。之ヲ讀ミ、先生ヲ追懷シテ、感慨無量ナルモノガアツタ。私ハ先生ノ京都帝大ヘ赴任セラレテカラノ、御世話ニ成ツタ、助手トシテノ最初ノ者デアリ、從テ先生ノ當時ヲ最も好ク知テ居ル一人デアル、思出モ深イ。

私モ先達カラ先生ノ思出ヲ少シ書キタイト思テ居タ、處ガ此頃編輯部ノ方カラ廣ク門下ヨリ先生ノ談片ヲ集メテ小冊子ニシタイ、何カ書ケト原稿用紙迄入レテノ御通知ガ有ツタ。

私ハ元來京都帝大醫學部トイフ學窓ガ生レル以前ノ京都府立醫學校ノ出身デ、明治32年、京都ニ今ノ帝大醫院ガ設立セラル、ニ及ンデ、猪子先生ノ御供ヲシテ移タノダ。何シロ當時創設ノコトデハアリ、帝國大學ノ醫學部トハイヒ條、既ニ完備シテシマツタ今日カラ見レバ、誠ニ何デモナク出來上ツタ様ニミエルモノ、渾沌タル其當時ノ有様ハ全ク整頓モ秩序モ容易ノコトデハナカツタノデアル（當初設置ニ就テノ所謂産ミノ惱ミノ甚大ナル苦心ト重責トヲ擔ハレタ猪子先生ノ活歴ハ更ニ機會ヲ得テ語ル時ガアルグラウ）。其混亂不整備ノ中ヘ先生ハ赴任シテ來ラレ、程ナク猪子先生ハ海外視察ノ旅ニ上ラレル、其御留守ヲ先生ガ視ラレタノダ。

先生ハ其頃年配モ丁度人間一生ノ働き盛りトイフ、最も元氣旺盛ナ30代デハアリ、體格モ頗ル頑丈デアラレタ、其故デモアラウガ、精力ノ絶倫ナコト非常ナモノデ、到底吾々若輩共ノ追從シ及ベヌ處デアツタ。即チ先生ハ其渾沌タル初期時代ノ京都帝大ノ外科ヲ、何デモ日本一ニシナケレバナラストイフ御考ヘデ、一生懸命奮闘シテ居ラレタ。殊ニ其頃ハ東京方面カラ見レバ、漸々生レ出タリノ創設時代ノコトデ有タガ故、幾分輕ク見ラレテ居タ傾キノアツタコトハ事實デアル（別段ニ低ク扱ツタトイフ譯デモナカツタラウガ）夫故先生ノ努力ハ一層猛烈ナモノガアツテ、ソレガ事毎ニ躍動シ、院政庶務ノ如キハ所謂

快刀亂麻ノ如ク處理セラレ、其外學生ノ教授ニ、吾々ノ指導ニ又患者ノ取扱ヒニ、猶ホ臨床學問上ノ報告ノ如キモ、一々自ラ筆ヲ執テ校正サレ、實ニ寸隙モナキ有様デ、其上夜ハ殆ンド圖書室ニ閉籠ツテ蠟燭ノ燈ノ下ニ（當時豫算ノ關係上電燈ナドハ用ユルコトガ出來ズ、往々蠟燭ノ燈デ仕事ヲシ、病室モ「ランプ」ハ火災ノ虞レアリトイフノデ、行燈ヲ用ヒテ居タコトガアル）、11時12時迄モ居ラレルトイフ緊張振り、夫レガ1日ヤ2日デナク1年モ2年モ續イタノダカラ凄イモノデアツタ。復タ吾々ノ面倒ヲ見テ下サツタコトモ、佐藤氏ヤ鳥瀉教授ノイハレタ通りデ、既ニ吾々ノ時代カラ先生ハ常ニ「自今年々歳々此所ヲ出ル人ハ何レ丈ケニナルカ判ラヌ、其處分ニ就テモ、吾々當事者トシテハ復タ考ヘナケレバナラス問題ダ、夫レ故今ノ内ニ相當ノログアツタナラ、占領シテ置テ、後進ヲ導イテ貰ハナケレバナラス」ト言ツテ居ラレタ。

明治 35 年ノ晩春ノ頃、何デモ4月ノ末カ、5月ノ初メデアツタと思フ。或日ノコト先生ハ突然私ニ「アノー何サン——先生ハ私ヲ呼ブニ何時モ何サント呼ンデ居ラレタ、夫レハ私ノ名前ガ少シ變テ居ルノデ餘程呼惡クカツタ様デアル——アシタ私ノ宅迄來テ下サイ」ト、一寸突然デアツタノデ、何ノ御用カ判ラズ、内心聊カ平カナラズシテ翌日御伺ヒシタ、處ガ席ニハ既ニ荒木先生ト、彦根病院ノ院長大日方氏トガ居ラレタ。大日方氏ハ荒木先生ト共ニ昔ノ東大別科ノ出身デ親マレテ居ル間柄デアル、伊藤先生ハ「アノー何サン、此大日方サンガ、今度彦根病院ノ副院長トシテ、外科主任ノ人ヲ招聘ニ來ラレタノデスガ、アナタニ行テ貰ヒタイデス」、何トモ即急ナ御話シデ、私トシテハ直グニ決メルコトモ出來ズー應家兄トモ相談ノ上御返事致シマスト申上ゲタ處ガ、先生ハ「アナタ、今直グ御返事シテ上ゲルコトハ出來マセンカ、アー、アナタハ養子デシタネ」私ハ「仰セノ通り養子デ、夫レモ普通ノ養子ト違テ小供ノ時カラ養育ヲ受ケタ義理ガアリマスアラ一度相談シテカラデナケレバ御返事申上兼マス」ト申シタ處、先生ハ「夫レハ無理モナイコト」ト御許シ下サツタ。斯ウイフ譯デ私ハ明治 35 年ノ5月ニ彦根病院ヘ赴任シタノダ、私ガ行テカラモ始終私ノ事ヲ心ニ懸ケテ下サレテ、其年ノ暑中休暇ニハ、珍シク奥サント御一緒ニ、伊勢ヘ行テノ歸リダト云ハレ、態々彦根迄廻ラレ、樂々園ニ御一泊、私ヲ呼ビニ寄コサレテ一夜細々ト病院ノ狀況ナドヲ聞カレタリ、且ツ失敗セヌ様ト、御自分ノ地方病院ニ於ケル經驗談ナドヲ話サレ、色々訓戒ヲ被ムツタ、私ハ此時程先生ノ人情味ノ篤イコトヲ感ジタコトハナカツタ。夫レカラ3年ノ後チ、復タ京都ノ東山病院カラ聘バレタ折モ、彦根病院トノ間ニ中々六ヶ敷イ契約ガ有ツタノヲ、失生ガ種々盡力シテ下サツテ、遂ニ再び京都ニ歸ツタ様ナ譯デアル、爾來20有餘年、私ノ一族ノ間ニモ大變動ガアリ、2、3親友ニモ先立タレ、今年ハマタ先生ヲ失ツテ、泌々ト淋シイ。

京 大 雜 誌 抄 讀 會  
府 大

一 月 卅 日 午 後 七 時

- |                              |   |       |   |
|------------------------------|---|-------|---|
| 1. 廣汎ナル胃切除後ニ於ケル胃及脾臓          | 淺 | 井     | 君 |
| 2. 「アベルチン」死ノ解折               | 福 | 富     | 君 |
| 3. 「アベルチン」麻酔ノ「チロキシン」ニヨル調節    | 山 | 根 (齊) | 君 |
| 4. 消毒劑トシテノ鹽酸ニツイテ             | 今 | 津     | 君 |
| 5. 術後虛脱ニ對スル「エフエドリソ」          | 高 | 橋     | 君 |
| 6. 全上膊骨ノ直接露出ニ對スル一切開法         | 根 | 本     | 君 |
| 7. 骨折ノ觀血的療法ニツイテ              | 山 | 根 (孝) | 君 |
| 8. <u>ビーヤ</u> 氏灼熱鐵應用ニヨル免疫性生成 | 中 | 島     | 君 |
| 9. 開胸術々前ニ於ケル全肋膜麻酔            | 淺 | 野     | 君 |
| 綜説 内臓疾患ノ合併症ニ就テ               | 猪 | 木 謹   | 師 |